

「Webの進化を探る」

チームラボ株式会社 代表取締役社長 猪子寿之氏

私の夢というか、会社の創業の理念は、「日本再生—情報社会においても日本という国を技術立国にしよう」ということである。今日の日本は、情報/技術の分野では後進国で、世界的な意味での競争力が無い状態である。われわれは、競争力がある会社に自らがなって、日本を「技術立国」へ導いていく力になりたい、情報化社会らしい Technology Oriented なサービスを日本から世界に届けたい。そう思っている。

今日の日本は本質的な価値や意義を考えず、大きな組織や体制や過去の権威や既存の権益に属することが美徳であるかのような状況である。この日本の閉塞的な状況を破っていくためには、そのイニシアティブを取れるビジネスパーソンとイノベーションを起こすエンジニアの存在が不可欠である。

私たちは、そのような「新しい価値を産もうとしている人々」を、社内は勿論、インターネット全体で関連する人も含めて「人材」として大変大事にしているのである。たとえ、コミュニケーションや挨拶は上手にできなくとも、あるいはおかしい服装であっても、「何か特別な価値を自分の手で産める人」に対しては本気になって敬意を払っていて、そういう人たちを応援したいと思っているし、実際、業務としてもそれらの人々の力を借りて私たちの仕事は成り立っているのである。

私たちは、インターネットのテクノロジー自体を研究開発していて、検索エンジンやマッチングある情報と情報をつなげて、関連性や最適性を持たせる—の技術を中心に取り組んでいる。

しかし、事業として収入を得ていく必要がある。それで、トータルソリューションとしては、Web コンサルタントとして企画設計から、総合でのインフラとして提供出来る Web の製作を行っている。また、その他、少しだが、ユーザーダイレクトのインターネットサービスの提供や、マーケティング（統計/確率）、最近ではオフィスの空間デザインや、2007 年モデルの携帯電話デザインプロジェクトなども平行して進めている。

今、情報化社会では何が起きているのか。それは「超情報飽和」と「超多様化」である。とりわけ私自身は「多様化」を強く意識していることで、ある意味で私が他の人より優れているといつてよいかもしれない。

従来の一般的な考えからすると、何かをつくるときにはプロが作って、プロの作ったものを素人がユーザーとして使うということだったと思う。ところが、それは間違いで、たとえユーザーといえどもある特定の部分についてはプロ以上の力を持っている。その人たちが集まってきてつくっていくものは、プロがつくるものよりももっと優れたものをつくる。何よりも圧倒的に効率よくつくってしまう。それならそういう人たちの力を借りよう。そういうパラダイムの転換。それが Web2.0 ということの意味である。

インターネットの初期の頃は、開発し提供する側の一方向的な志向が強くて、しかも初期の段階にあったころは情報発信だけでも目立っていた。だが、これから先を考えると、今、大きな問題が提起されてきていると思う。

それは「ゆるい」考えを持っていた人たちの存在である。自分のサイトや技術は「自由に使って良いよ」と開放した側が勝ち始めた、インターネットの世界の主流になってきたということである。また、たとえば、従来のマーケティングや広告や、あるいはビジネスの分野でも、従来からプロと言われてきた人たちではない、新しいタイプの人たちの価値が増大して来ているよう

に思う。

たとえば、車などエンジニアはエンジンを設計し、デザイナーはそれにカバーするようにデザインしてきたが、情報化社会においてはその区別は一切無くなり、各分野の基本は情報（データ）となって1つに形づくられる。その結果、テクノロジーとデザインの境界線は無くなり、仕事をしていくためには双方を理解していくことが重要となる。

当社の検索エンジン SAGOOL で「どらえもん」と検索すると 45.700 件ヒットする。Google で同じ検索をすると 8.690.000 件ヒットする。SAGOOL の場合には「面白い順」にでてくるが、Google の場合には「公式情報」がトップに出てくるようになっている。要するにアルゴリズムが違うのである。

OS や MPU は、アメリカの政策的な主導により今日に至っている。さらにこれに付随して、オフィス用ソフトや Web ブラウザーも、同様な路線を進んで来た。それらは、現在、オフィスや家庭に定着し活用されている。中でも検索エンジンの使用率は大変高いものである。だが、その結果、そこで使用される膨大な検索ワードの蓄積や検索のためのアルゴリズムについて、いわば日本語環境を他国語へ委ねた状況にもなっている。

そのような中、今回のチームラボ側の持つ技術は、これからの日本の方向性を決めて行く上でも、大変重要なファクターの1つと成りえるのではないか。

また、データベースの活用には、バックグラウンドで行われる膨大なデータ入力作業も必要となる。これらの作業工程を含め、総合的に工数を縮小できるような、検索アルゴリズムとデータベース環境に対しても、もう一度目を向けて見直す必要を強く感じた次第である。